

てくみゅ TechnoMuseum of NUT

表紙の立体の表面に写っているのは
高濃度希土類添加蛍光体です。

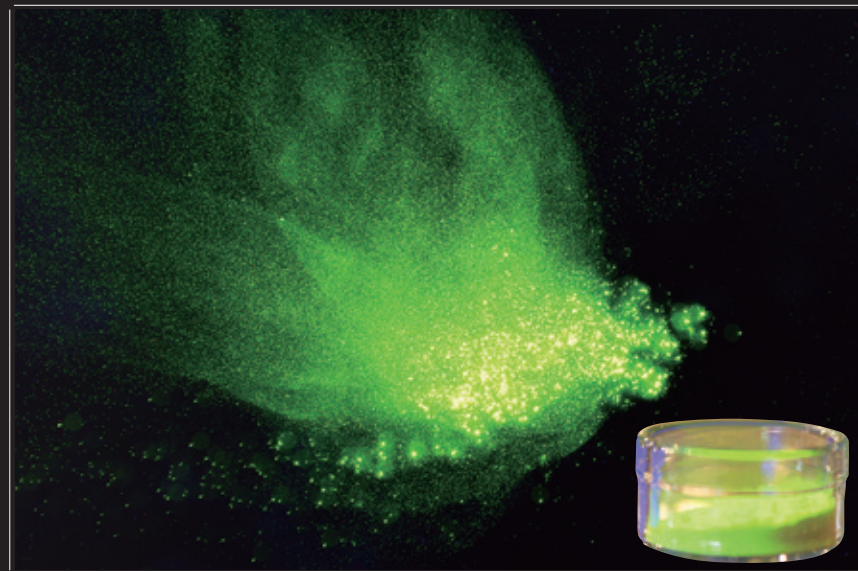


写真1 ユーロピウム添加チオガレート蛍光体

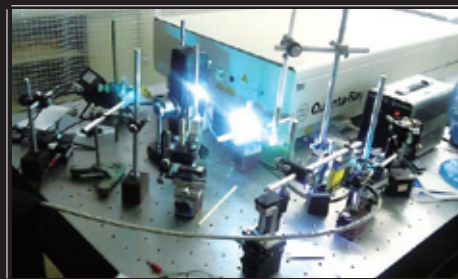
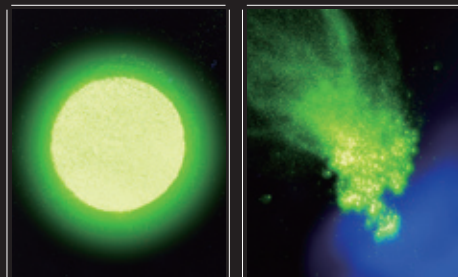


写真2 光増幅実験の様子

高濃度希土類添加蛍光体 ～表示・照明用光デバイスの小型化と高効率化を目指して～

電気系 准教授 加藤 有行
ARIYUKI KATO

近年、半導体による発光デバイスの進展がめざましいですが、表示や照明のために利用するには、特定の波長だけではなく幅広い波長範囲で高効率の発光が必要となります。ユーロピウムやセリウム等の希土類元素を発光源(発光中心)として添加した蛍光体材料には、高効率かつ波長範囲の広い発光を示すものがあることから古くから盛んに研究されてきました。

しかし、発光源である希土類元素の濃度を

高くすると、数%程度の濃度でも発光が著しく弱くなってしまうという問題点(濃度消光)がありました。写真1に示すユーロピウム添加チオガレート化合物は、緑黄色領域に高効率の発光を示す蛍光体ですが、我々の研究室では発光源であるユーロピウムの濃度をこの化合物の限界まで高くしても(完全置換しても)、発光が弱くならないことを発見しました。

発光源の濃度を高くできるということは、その濃度に反比例して素子のサイズを小さくで

きます。例えば、発光波長範囲が広いことを利用した波長可変レーザーとして用いる場合、現在商用化されているものに比べ、3～4桁も素子のサイズを小さくする(ミクロンオーダーサイズにする)ことが可能と予測され、実際に高い光増幅率を持つことを長岡高専との共同研究により実験的にも証明しました(写真2)。

現在、この材料を高効率白色蛍光パネルや超小型波長可変レーザーとして利用するためにさらなる研究を行っています。

編集後記

この時期には沢山の学生、そして教職員が本学を去っていきます。大学にとって人は宝物であり、研いてさらに輝きを増す宝石のようなもの。本号には「贈る言葉」「卒業・修了にあたって」「そして退職にあたって」と、それぞれの個性・人生観と想いのつまった記事が満載です。去る人がいて来る人がいる。歳月の流れの中で繰り返される人の去来は、大学が生きていることの証ではないでしょうか。研ぎあがった宝石の一言一言に、一期一会の思いを深く感じる「記念号」です。

VOSの由来 本学のモットーである、Vitality, Originality, Servicesの頭文字をとって、本学初代学長の故川上正光氏により名付けられました。



長岡技術科学大学

VOS NO.150 [平成21年3月号]
編集発行 長岡技術科学大学広報委員会[総務部 総務課]
◎本誌に対するご意見等は下記までお寄せ下さい。
〒940-2188 新潟県長岡市上富岡町1603-1
Tel.0258-47-9209 Fax.0258-47-9000
E-mail : skoho@jcom.nagaokaut.ac.jp URL : http://www.nagaokaut.ac.jp/

VOS 2009 March NO.150

Nagaoka University of Technology



長岡技術科学大学

Nagaoka University of Technology

NO.150
2009.March

VOS
VITALITY
ORIGINALITY
AND
SERVICES
長岡技術科学大学 広報

特集 卒業・修了

CONTENTS

02_ 学長告辞

04_ 卒業・修了を祝して

06_ 贈る言葉／卒業・修了にあたって

15_ 退職にあたって

20_ 展示品紹介／編集後記

表紙の立体に写っている「高濃度希土類添加蛍光体」は20ページで紹介しています。

特集

祝 卒業・修了

学長告辞



かたつむり 登らば登れ 富士の山

長岡技術科学大学長
小島 陽

YO KOJIMA

卒業生・修了生の諸君、おめでとう。

本日、ここに、平成20年度の卒業式・修了式を迎え、学士、修士そして博士の学位を得た諸君に心からお祝い申し上げます。また、諸君をこれまで長年にわたり育て、支えてこられたご家族に御礼とともにお祝い申し上げます。

留学生の諸君。故国を遠く離れ、言語・文化の異なる地での生活、学習には大変な苦労があったかと思います。諸君の努力に敬意を表すとともに、さらに研鑽を積んで、それぞれの故国の発展に力を尽くすことを祈念します。

みなさんは、社会人になる人、さらに、進学する人など、それぞれ異なる道を歩むこととなりますが、今日を新たな出発点として、大きく羽ばたいてください。

世の中、「Change」，「変」がキーワードです。日々、漫然と過ごすのではなく、常に進化、進歩してください。人生行路は常に平坦な道だけではありません。逆境の時は苦しいが、これを乗り越えた時大きな喜びがあり、貴重な体験を得ます。この体験を重ねることにより人は成長します。総合的な複眼的な視点から柔軟な思考と熱い情熱で対処してください。さらに、誠実つまり「公正、正直、不屈」の

精神で仕事に取り組んでください。与えられた場所で常にベストを尽くしてほしい。働く上で重要なのは、「その仕事が自分の意思によるものか」ということです。与えられた仕事であれ、自らの意思で、自ら考えて行動することが大切です。そうすれば、必ず工夫するようになります。創造性が出てきます。

人生は、誰にも平等、公平とはなっていません。しかし、チャンスはある程度平等に訪れます。そのチャンスをつかむ準備ができていくかどうか重要です。では、どうやって準備すればよいのか。妙手や近道はありません。普段からまじめにひたすら努力するしかありません。よく自分が成功しないのは、自分に才能がないからという人がいますが、成功は努力7割、運2割、才能1割といえます。人間には「過去の経験から未来を予測する」とか「目標を決めてそれに向かって努力する」といった人間しか持たない特殊な能力があります。若いみなさんに、ぜひお願いしたいのは、嫌なこと、やりたくないこと、避けていることを、毎日少しずついいから取り組んで、改善する努力をしてください。そういった意識を持つ、つまり、現状に満足しないことが大切です。作家の加藤 廣氏は「自分のための30分」を確保するよう述べています。加藤氏は、常々、自己を厳しく律し自己研鑽に努めるよう心がけているとのこと。例えば、週末の二日のうち、

一日は家族のために使う。でももう一日は、読書やものを書くことにあてるというように自分の時間を大切にしてきたと言います。一日の中でどんなに多忙でも大切にしたのは「自分のための30分」。「何か身に付けなければいけない」との思いから、なんとかこの30分を確保し、簿記を勉強したり、「ニューズウィーク」など英語誌を読んだりする時間に充てたとのこと。大学時代は無縁だった簿記の読み方にも慣れ、就職して数年で英検1級も取得したそうです。毎日続ける習慣は今も続いているそうです。執筆のため体を鍛えようと日々20分、体をブラシで摩擦。その後、30分は自己流の体操をするそうです。継続は力です。みなさんも心がけてください。

「かたつむり 登らば登れ 富士の山」という言葉があります。日々の努力で、自分で登り坂をつくり、常に登り坂の途上にいる姿勢がすばらしいと思います。どんな小さなことでも、とことんやり抜く必要があります。大きな夢を描き、小さな一歩を踏み出せです。

いよいよ、旅立ちの時となりました。100年に一度といわれる未曾有の世界大不況の年に巣立つ諸君。本学のVOS精神に則り、努力、勤勉、責任感を持った、新しい文明を拓く技術の担い手として大成されることを祈念して告辞いたします。



特集

祝 卒業・修了

卒業・修了を祝して



理事・副学長
(評価・産学官・地域連携担当)

西口 郁三

IKUZO NISHIGUCHI

「ピンチこそチャンス」に変えて、人生の成功と華を手につく

大学院修了および学部卒業の諸君、栄えあるご修了・ご卒業おめでとうございます！

諸君が、本学での所定の試験や審査に合格し、専攻や課程を無事終了して、此度めでたく博士、修士または学士の学位を取得できた事は、勿論諸君の不斷の努力や研鑽の賜物であることは言うまでもありません。しかし、同時にこれまで長きに亘って諸君を指導し、支援し、激励してこられた御両親をはじめとする御家族、先生、先輩そして友人への、真摯な感謝の気持ちを長く忘れないで戴きたい。

さて、昨年の米国の金融恐慌に端を発する世界的な大経済不況は、我が国の経済状況にもいろいろな面で未曾有の危機的状態を引き起こし、諸君が新社会人としての第一歩を踏み出す環境は誠に厳しく、前途に多くの苦境や困難が予想されます。しかし、逆説的な言い方をすれば、同期に就職した競争相手が少ない分だけより多くの機会が与えられる可能性が高い訳です。しかし、いくら幸運な機会が巡ってきても、その機会を確実に掴み、自らのものにするには、それだけの力が常にきちんと用意されていなければなりません。

そこで、こういう厳しい時代を生き抜いて行くためには、今までの学生時代の甘え、怠惰やいい加減さをきっぱり捨てて、「自由」や「個性尊重」を、「放縦」や「我が儘」とはき違える事なく、しっかりとした考え方と厳しい意味での本当の実力をつけることが重要になります。

また、実社会では、自己本位な個人プレ

ーや甘えは許されませんが、「組織のルールや規律を遵守した上で組織の中に埋もれる事なく、個性や独創性をどしどし発揮する」事は大いに求められます。大学とは目的が違うため「時間」「コスト」「品質」が重視され、組織の中では「報告」「連絡」「相談」(3つまとめて「ホウレンソウ」)を心掛けることが極めて必要です。

諸君は、本学の教育理念である「実践的、創造的技術者・研究者としての実力と根性」を十分に体得しており、VOS精神を肝に銘じて、常に切磋琢磨し、自己研鑽に励めば、必ずや大きなチャンスを掴むことができます。ただ、人生には浮き沈みや運不運はつきものであり、不運な時、逆境にある時こそ、この雪深い長岡の生活で学んだ「我慢強さ」「根太さ」と「しなやかな強さ」を存分に発揮して、「ピンチこそチャンスにする」強靱な気力、知力、体力に益々磨きをかけて苦難を見事に乗り越え、「都会育ちの要領の良い脆弱な優等生」に有為の差を付け、人生の成功と「華」を手につくんで下さい。

徳川260年の江戸幕府の基礎を作った徳川家康は、「人生とは重き荷物を背負って、険しい山道を登るがごとし」との有名な人生訓を残しており、「苦勞の種は必ず花開く」などの古い諺は今でも人生の真実を語っていると思います。

諸君の輝かしい未来の素晴らしい幸運と大活躍を心より祈っております。



長岡市長
森 民夫

TAMIO MORI

イノベーションを期待する

長岡技術科学大学に学び、修了、卒業を迎えられるみなさんに、心からお祝い申し上げます。

みなさんの多くは、卒業後は長岡のまちを離れ、全国にそして世界に活躍の場を広げていかれると思います。そこで、大学を後にするみなさんには、ぜひ長岡の応援団になっていただきたい。また、留学生のみなさんからは、母国に帰ってからも長岡を忘れずに、国際交流の架け橋になっていただきたいと願っております。

さて、ご承知のとおり、米国発の金融危機は大きなうねりとなり、景気後退の波が世界に押し寄せています。モノづくりを離れ金融に邁進した米国、世界の工場となった中国、そして日本はどこへ向かうのか。あらためて世界を見渡せばエネルギーや食料不足、国内では年金・医療といった社会保障の問題など、多くの課題が山積しています。そう、これが、みなさんが飛び込む現実の社会であります。

とはいえ、不安ばかりをつのらせても仕方ありません。苦しければ苦しいほど、死にものぐ

るいで知恵を絞り局面を開く。これが人類の歴史だからです。

若いみなさんに期待したいことは、ぜひ、人生の照準を社会貢献に合わせ、イノベーションをおこしてほしいということです。イノベーションは狭義では技術革新と訳されることもありますが、これまでのモノや仕組みに対し、新しい技術や考え方を取り入れて価値を創造する作業です。従来の経済や社会に大きなインパクトを与えるべきものなのです。そして、イノベーションは決して楽な作業ではありません、むしろ辛いことが多いと思います。しかし、一人ひとりが、自らの強みの上に己を築き取り組むことで、必ず明るい将来が開けていくと私は確信しています。

長岡市は、みなさんのふるさとです。大河信濃川、夏の大花火大会、おいしいお米やお酒、たくさんの思い出が詰まった学生生活をどうか忘れないでほしいと思います。

新しい環境で、みなさんが存分に力を発揮されますよう、長岡市民とともに心から応援申し上げます。



特集

祝 卒業・修了

系長から贈る言葉



機械系長
矢鍋 重夫

SHIGEO YANABE

いまのままの自分でいいですか

卒業・修了、おめでとうございます。
世界を覆いつくす未曾有の金融危機と消費の緊縮にともなう生産調整・雇用調整の嵐が吹き荒れています。多分、数年すれば、アメリカ、BRICS 諸国、日本等で、新たな需要に対応する産業が生み出され、消費が回復し、生産も雇用も上向くことと思います。こうした時代に社会へ船出する諸君ですが、「春が来ない冬はない」と信じて、めったに経験できない危機の回復過程をよく見届けてください。

振り返って、かなり厳しい環境下でも仕事をしていける自信ができましたか。授業や研究、実務訓練を通して、基礎力、専門力、広い視野、コミュニケーション能力、論理的

思考力、問題発見・解決能力、自己啓発力などが身についたでしょうか。これらは、本学機械創造工学課程や専攻の教育目標です。「身につきました。」と自信を持って言えるひとはあまり多くはないように思います。大切なことは、常に向上心をもって、より高い目標を設定し、それに向けて努力する自己啓発の心をもつことだと思います。「いまのままの自分でいいですか？」と自問することを心がけてください。将来が少しずつ開けてくると思います。人間社会が遭遇している大きな問題の解決を目標に掲げて、頑張ってみてはいかがですか。諸君らのますますの成長と活躍を楽しみにしています。

卒業・修了にあたって

学部(留学生)



機械創造工学課程4年
(マレーシア出身)
ワン ムハマド ヌル ジクリ ビン マット ダウド

WAN MUHAMAD NUR ZIKRI BIN MAT DAUD

勉強と遊びに最高～! 日本

日本での生活も4年が経とうとしています。日本に来たばかりの頃は、電車の切符を買うにも、先輩たちに頼んでいましたが、今は色々な事を自分で出来るようになりました。

長岡では春夏秋冬、日本の四季の変化を本当に楽しんで(長岡の冬は厳しかったですが…)過ごすことができました。スポーツが好きな私は、冬はスノーボード、春は技大生と一緒にサッカーをやりました。サッカーでは、私のチームはいつも日本人のチームに負けていたので、さすがワールドカップに出場する国だと思いました。夏は日本の色々な所へ旅行し、日本の文化や考え方などを学んで、日本での生活にとても役立

ちました。秋は日本人とほかの国からの留学生と一緒にフットサルをやって、たくさんの友達が出来て本当に良かったと思います。

研究では、論文を書くのが非常に難しかったですが、先生と研究室の皆さんからアドバイスをもらったり、色々なことを教えてもらったりして、心から感謝しています。ありがとうございます!

最後になりましたが、日本に来て色々なことを学んだり、経験をしたり、たくさん楽しい思い出を作ることができて本当に良かったと思います。機会があれば、1、2年後にまた日本に戻りたいと強く思っています。



2005年、長岡技大フットサル大会

系長から贈る言葉



電気系長
大石 潔

KIYOSHI OHISHI

Whom much is given, much is expected.

ご卒業、ご修了、おめでとうございます。
これから、社会人として歩み出されるみなさんに、心よりお祝いを申し上げます。『Whom much is given, much is expected.----- 多くを与えられた者は多くを求められる。』という言葉があります。これは、「恵まれている人は恵みの上にあぐらをかいてはいけません。そして、その恵みをどうすれば、多くの人々に分け与えられることになるかを考えなければいけないのだ。」という意味です。

みなさんは長岡技術科学大学での生活で、ご家族、先生方や友人をはじめ、様々な人々に支えられ、学問的な知識や技術にとどまらず多くのものを享受してきたと思います。そうなのです。みなさんは『多くを与えられた者』な

のです。そして、多くを与えられた者は『多くを求められる』のです。

私たちはどうしても(私自身も含めて)、自分の置かれている状況に慣れてしまい、自分がいかにたくさん与えられた者であるかということに気づかないのです。これは単に経済的な豊かさのみを言っている言葉ではありません。

みなさんがこの長岡技術科学大学で学ばれた『工学』の技術や知識を基として、自分が享受したものを、いかに多くの人々の幸福のために使えるかという思いを心の中にもって、これからの人生を歩んでいって欲しいと思います。

みなさんのご活躍に期待しています。

卒業・修了にあたって

学部



電気電子情報工学課程4年
(新潟県立巻高校出身)
茂呂 瞳

HITOMI MORO

卒業にあたって

私はこの大学を卒業しようとしています。大学に入って初めての経験がたくさんありました。一人暮らしを始めたり、アルバイトをしてみたり、就職活動をしたり、学業以外でも、人生において大きな変化のある時間でした。

この大学生活では辛いことも多かったと思います。本当にもう嫌だ、やめたいと思うこともありました。でも、最後まで成し遂げることができたのは私の根性ではなく、友人や両親の存在に尽きます。自分一人よりも、誰かと一緒に頑張ったり、励ましてもらえる人がいるだけで、頑張れると思います。

これから社会人としての人生が始まります

が、ここで勉強したことを活かして大きく成長できるように一層、精進していきたいと思います。また、更に視野を広げられるように様々なことに挑戦する気持ちを忘れないようにしていきます。

最後に、先生方にはご面倒をかけてしまい、申し訳ないという気持ちとともに、温かく見守ってくださったことに感謝の気持ちでいっぱい입니다。その分だけいろいろな形に変えて社会に恩返しできるように頑張っていきたいと思っています。今までお世話になった両親や友人、私に関わった全ての方に感謝したいと思います。ありがとうございました。



課題研究の追い込み

特集

祝 卒業・修了

系長から贈る言葉

物質・材料系長
塩見 友雄

TOMOO SHIOMI

諸君への期待

ご卒業、ご修了おめでとうございます。諸君は在学中多くのことを学んできました。それは単に知識ばかりでなく、観察力や研究の進め方、さらには課外活動や遊び、友人・先生や学外の人たちを通じても種々のことを学びました。今の自分の顔を大学へ入る前の写真と見比べて下さい。顔や目が一段と輝いているのを見えるでしょう。それだけ成長してきたことに自信を持って下さい。

昨年来、金融不安をきっかけに全世界が未曾有の経済危機に陥っていると言われていいます。金に金をうませるということのやりすぎかも知れませんが、やはり生産と結びついた経済活動でなければならないと思います。諸君らは今後様々な社会状況に身

を置くことと思いますが、人々の幸せのための技術の開発を心に留めて下さい。結局はそのような技術者・研究者の努力の成果が社会の発展と人々のために寄与することになります。

1年の長さは年齢に反比例して短くなるといえます。それはたぶん1年間に得る新たな知識や体験の量に比例するからでしょう。若いときは十分な体力と精神力があります。高い山に登れば登るほど多くのものが見え、また歳を取ってもそう簡単に下まで下ってしまうことはありません。諸君は卒業・修了で一つの山に登りました。次にはその地点からさらに高い山に登ることが出来ます。諸君の前途は洋々としています。自分に自信と誇りを持ってかつ他人を大切に活躍されることを期待します。

卒業・修了にあたって

大学院修士課程

材料開発工学専攻2年
(新潟県立高田高校出身)
永井 太一

TAICHI NAGAI

師の愛・友の助けあり

長岡での6年間はサークル活動や研究室を通じて多くの人と出会うことができ、思い出深いものとなりました。

サークル活動では、高校から始めた陸上競技部に所属し全国各地の大会に参加しました。目標に向け仲間と一緒に長岡を駆け巡った日々も今では大切な思い出です。練習だけでなく、飲み会などの行事も多く、先輩・後輩の域を超えて親しくしていただきました。

大学院では、研究室の友人・仲間に恵まれ、研究に不安を抱えながらも一緒に考えてくれたり、励ましてくれました。ときにはパーティーをしたり、疲れたときには温泉に行き

たりしました。研究に行き詰まった時期もありましたが、ご指導いただいた先生と何度も研究の議論を交わし、2008年電気化学会・表面技術協会の合同支部大会では最優秀発表賞を頂くことができました。

大学での様々な経験と全国各地の友人に出会えたことは財産であり、自分自身の視野を広げることができました。充実した大学生活を過ごすことができたのも支えてくれたみなさんのおかげです。大学院進学を理解し、常に応援してくれた両親には本当に感謝しています。春からは社会人として大学で学んだことを糧に何事にも前向きに挑戦していきたいです。



研究室のメンバーと

系長から贈る言葉

環境・建設系長
丸山 暉彦

TERUHIKO MARUYAMA

卒業・修了にあたって

学部

環境システム工学課程4年
(群馬高専出身)
津金 優歩

YUHO TSUGANE

大学生生活を振り返って

時が経つのは早いもので、ここ長岡技術科学大学に編入し、早2年が経過しようとしています。振り返れば本当について先日、入学式を行ったばかりのように感じます。

編入当初は初めての一人暮らしと慣れない環境で、大学生活に不安を持っていましたが、同郷の友人や気の合う友人との出会いで、いつの間にか不安は消え、充実した大学生活を送ってこられたと思います。

学部4年になり研究室に配属されると生活が一変しました。研究による課外活動も増え、夜更けまでの活動や徹夜での作業などを行うこともあり、次第に不平不満がたまり、研究を放ってしまいたいと思うこともあり

ました。遊んだことが一番役に立っていますよという答えが返ってきました。2004年と2007年に大きな地震があり、長岡周辺の地域が大きな被害を受けました。ボランティア活動をされた方も多いと思います。被災地を訪問すると、いまでも「長岡技科大の学生さんにはお世話になりました」とお礼を言われます。ユニークな先輩、ユニークな先生がいることで他どの大学にも負けません。皆さんもユニークな卒業生になって、後輩が目丸くして驚くような楽しい伝統をつくってください。私はこの大学で働いていることを誇りに思っています。

んな時支えてくれたのは、苦楽を共にした友人や先輩たちでした。一人ではどうにもならない事態に陥った時にいただいた励ましの言葉やアドバイスにはどれだけ助けられたことかわかりません。こうして振り返ると、今の自分があるのは、本当に周囲の方々に支えられたからこそであると感じます。

春からは私も社会に出ますが、この学校で学んだことや経験を生かしこれからも努力していきたいと思います。

最後にこれまで私を支えてくれた家族や友人、先輩、ご指導いただいた先生方に心から感謝したいと思います。今まで本当にありがとうございました。



研究室にてリンゴパーティー

特集

祝 卒業・修了

系長から贈る言葉



生物系長
古川 清

KIYOSHI FURUKAWA

人生の区切りを大切に

人は社会の中で生きていく過程で、入学・卒業、入社・異動・退社など人生で多くの区切りを迎える。そこには残る人、去り行く人、新たに出会う人、様々な感情が交錯し、区切りが盛り上がる。ここで大事なことはこれまでの一区切りを振り返り、次の区切りをどのように生きようかと思案することである。多くの人はこの連続した人生の区切りを何も考えずに通過してしまうが、成長するには区切りの認識が重要である。区切りごとに目標を定め、それに向かって努力するのである。しかし心に抱いた目標の多くは、日々の生活の中に埋没し消えてしまう。生物の進化は、失敗から始まっている。失敗を克服した生物は新たな機能を獲得し、環境に適応し生き残っていくことができる。本日の卒業と修了

を単に証書もらうことに終わらせず、これまで自分がどのように生きてきたかを認識し、それをベースに次の一区切りの目標を定めたい。人生の一区切り一区切りは単調かもしれないが、各区切りで培われた固有の音がやがて重音となり、人生に素晴らしい響きをもたらしてくれる。長岡技術科学大学で培った音は、社会で培った音の基礎となり、それがまた次の区切りの基音となり、重音の響きはさらに深くなる。そんな素晴らしい重音の響きを、バッハの無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番の第5楽章「シャコンヌ」に聞くことができる。本学で培った音をベースに、人生の次の一区切り、皆さんはどんな目標をもって生きますか。ここで改めて、卒業・修了おめでとう。

卒業・修了にあたって 大学院修士課程



生物機能工学専攻2年
(一関高専出身)
小野寺 朋子

TOMOKO ONODERA

4年間は短くて長かった

4年前、歩道に積み上げられた雪によって作られた壁(通称:雪壁)に驚愕していたところ、消雪パイプから水鉄砲の洗礼を受けました・・・そうして私の大学生活は始まったのであります。『大学生活』という文字から、にわかにかもし出されるプリリアントなイメージに翻弄され、私には輝かしい毎日が待っている!と信じて(妄想して)いたのに・・・実際の感じは高専となんら変わらない、学部の頃はそんな風に思っていました。毎日、授業と実験と課題と試験に追われて、要領の悪い私は遊ぶこともままならず、ただ時が過ぎるのを待つだけ。「これが大学の現実かー。」とうな垂れておりました。しかし、そんな生活も研

究室配属を期に一変したのであります!学部の頃は、なんだかよくわからないまま実務訓練に飛ばされたので、記憶が定かではありませんが、修士に入ってからというもの、私の生活は充実していたでしょう。ええ、そうに違いありません。研究は、苦しかったけど楽しかったのです!!(たぶん、恐らく)。それを、歯をボロボロにして歯茎から血が出るほど噛み締められた修士の2年間は、きっと私の人生で忘れられない時間になったことでしょう。こんな私を諦めずに指導してくださった、先生、先輩、同級生、後輩の方々、本当にお世話になりました!!これからは、もっとプリリアントな人生を送れるようにがんばります!キラッ☆



森川研究室の皆様。感謝致します

系長から贈る言葉



経営情報系長
中村 和男

KAZUO NAKAMURA

時代を拓く技術者に

経営情報システム工学課程および専攻の皆さん、卒業、修了おめでとうございます。

この2008年度は金融危機が世界を覆い、モノ作りの象徴であった自動車産業でさえ大幅な落ち込みとなりました。

技術者としての皆さんは、これまでに培った英知と技術を生かしモノ作りに取り組んでゆかなければならないのですが、どんなモノをどのように作ってゆくのか、技術者の立場から深く考え、積極的に提案してゆく姿勢をもって欲しいと思います。

私が学生時代に乗っていたコンパクトな車に、バブリカという車がありました。当時の国民経済レベルからは千ドルカー(36万円)を目指し開発され、空冷水平対向2気筒700cc

のエンジンで28馬力を出し、実に24km/ℓの低燃費を引き出しました。道路事情を考えれば、最高速度100km余り、4人乗りではありましたが、庶民のマイカーの夢をかなえてくれたように思われます。

社会の高齢化、深刻な温暖化に備えなければならない今、モータリゼーションはもちろん、世界を結ぶ情報通信環境、ビジネスのみならず家事や介護を支援する知能ロボットなどをどちらに向けてどう開発してゆけばよいのか? 技術者には、時代の風を読み、技術の可能性を見極め、先見性を発揮して、革新的なモノ作りで社会を切り拓いていって欲しいものです。

皆さんの将来に期待を込めて。

卒業・修了にあたって 大学院修士課程



経営情報システム工学専攻2年
(兵庫県立西脇工業高校出身)
丸山 由佳

YUKA MARUYAMA

6年間をふりかえって

大学に入学してから6年が過ぎようとしています。はじめは遠く離れた地である長岡に来ることに不安もありましたが、振り返ってみると、この大学に進学して本当によかったと思います。

大学・大学院での生活は、授業や研究に何とかと忙しい日々で、図書館や実験室に集まり、夜遅くまで勉強していたこともありましたが、それでもみんなで切磋琢磨しながら勉強していた時間はとても楽しく、充実していたように思います。また、様々な地域や国から来られている方々とたくさんお話をし、様々な考え方に触れることで、物事の多面性を学び、また自

分の視野を広げることもできました。

長いようで短かった6年間、楽しいこともあり辛いこともありましたが、それら全てが貴重な経験になりました。春からは社会人になりますが、ここで学んだことを土台とし、何事にも積極的に真剣に取り組んでいこうと思っています。

最後になりましたが、ご指導いただきました先生方、支えてくださった研究室のみなさん、友人、先輩・後輩には大変お世話になりました。また、私を理解し支えてくれた家族に心から感謝しております。本当にありがとうございます。



合宿研修にて

特集

祝 卒業・修了

系長から贈る言葉



システム安全系長
武藤 睦治

YOSHIHARU MUTOH

日本の安全社会の担い手となった皆さんへ

皆さん、修了誠におめでとうございます。仕事をこなしていくだけでも容易ではなくなったこの時代に、仕事をしながらの2年間の勉学に向けての努力・気力に敬意を表します。日本の社会では、安全は当たり前という根拠のない常識があります。この日本文化をそのまま海外に持ち込み、多くの旅行者が事件に巻き込まれ、被害を受けていることはよく知られています。危険から身を守り、安全を確保するには、皆さんが本学で学ばれたように、国

際的に認められた方法があります。多くの企業を見学すると、最近ではリスクアセスメントという言葉が出てくるなど、以前の「安全第一」（安全教育・訓練第一）とは少し意識が変わってきたように感じることがあります。しかし、いかにせん安全のわかる人材の不足は明白です。日本が、信じたい安心社会でなく、ロジカルに安全確保する社会となるためには、皆さんのこれからのご活躍と、本学との連携が欠かせません。大いに期待しているところです。

卒業・修了にあたって 専門職学位課程



システム安全専攻2年
(社会人)
山本 幹夫

MIKIO YAMAMOTO

夢の実現に向けて

長岡技大で安全を学ぶ機会を得たことは、私の夢の実現でした。私は磁石の材料開発と製造技術者として三十数年過ごしましたが、会社を辞めたら新たな知識を学んでリフレッシュして、再び社会に貢献したいという夢がありました。

安全は言うまでもなく、人の命に直結する最重要な課題です。これまでの仕事を通じて安全の大切さは知っていましたが、この2年間の学習を通じて、安全を実現するための原

理原則や、グローバルな世界の動きなど、安全の分野は深く広大なことがわかりました。

私のこれからの人生にとって、この2回目の学生生活は大切な分岐点となるでしょう。

私が専攻したシステム安全は、社会人が対象ですが、ここで経験豊かな多くの素晴らしい仲間に出会いました。多彩な分野で既に専門知識をもった多士済々が、『安全』をキーワードに共に学ぶ時間は、ゴージャスだとか言いようがありません。先生方には、無遠慮な突っ込み質問にもめげず真摯にご指導いただきましたこと、心から感謝申し上げます。うるさいおやじ学生ばかりで、さぞやりにくい講義だったのではなからうかと案じておりました。

私の現在の到達点を省みると、安全の分野の大きさが見えてきたに過ぎませんが、お世話になった先生方や、ここで出会った仲間にもこれからも援けてもらいながら、社会の安全の実現に何が出来るか、考えていきたいと思っています。

『安全に終わりはない』は、昨年の一期生が残した言葉です。私はこれに、『学ぶことに終わりはない』を付け加えたいと思います。



インターンシップで訪れたブタベストにて（背景は国会議事堂）

系長から贈る言葉



教育開発系長
副学長（教務担当）
宮田 保教

YASUNORI MIYATA

卒業生の皆さんへ

卒業生、修了生の諸君、おめでとう。これからは、Passiveな学生生活に別れをつけ、Activeな社会人としての生活に身を置くことになります。これからは、身につけた技術・科学をもって社会に立ち向かい、自分で考え実行していく、皆さんの時代です。

長岡技術科学大学の教育のモットーは Vitality, Originality, Service (VOS) であり、本学で実践 (Active)、英知 (Basic knowledge)、創造 (Creative) を目標に教育を受けた皆さんは、これら素養を身につけ社会に巣立っていくわけです。今、経済危機が騒がれますが、「危機」という言葉は、「危険」の危と、「機会」の機からで

きています。危険は、一方では、チャンスを生み出します。「無限の風光、陰峰にあり」という言葉もあります。他の専門分野の勉強であれ語学の習得であれ、自分で自分自身を甘えさせることなく、自分自身を鍛え続け、陰峰に挑んでください。

変革の時代に対処していくのは大変ですが、見方を変えればそれに匹敵するだけの大きな成功のチャンスがあるということです。本大学で学んだ皆さんには、陰峰を乗り越えられる力が十分蓄えられていると信じます。その先には、それまで気づかれなかったものが沢山あるはずです。是非、無限の風光をつかみとってください。

卒業・修了にあたって 大学院博士後期課程



エネルギー・環境工学専攻2年
(秋田高専 専攻科出身)
佐沢 政樹

MASAKI SAZAWA

幸せな学生生活

修士・博士の学生生活を技大生として過ごしました。修士1年のときに長岡に来て、パワー研のメンバーになって以降、楽しいこと辛いこと、いろいろな思い出があり、とても密度の濃い幸せな時間を得ることができました。

学生生活は、実験、論文執筆、学会発表など、時間がいくらあっても足りず、修士から博士課程へと、年を追うごとにさらに加速したように感じました。研究成果の発表では、国際会議にも何度が参加させていただきました。その場では、自分の研究したことが誰もやっていない、最先端の場所に自分もいることを感じ、そして、他の大学や研究機関の研

究者と接し刺激を受け、次の日からの研究のやる気へとつながりました。

また、入学当初に頼れる存在だった先輩たちのように自分もなれているのか？と思うと、もっと努力していればと思うことも多くありますが、同期の友人たち、先輩・後輩、そして先生方に支えられてきたからこそ、今の自分があると実感しております。これからも、本学で学んだ経験を生かして一層の努力を重ね、成長していきたいと思っています。

今まで御世話になりました先生方、友人そして家族に深く感謝致します。これからも宜しくお願い致します。



2008年学長杯ソフトボール大会優勝

特集 祝 卒業・修了

贈る言葉



むつみ会会長 月刊マイスキップ代表
長岡フィルムコミッション会長
渡辺 千雅
CHIGA WATANABE

長岡は「人づくり」の町

長岡には『米百俵』の精神があります。
1868年、戦争で焼け野原となった長岡に救援米、百俵(6t)が届きますが、餓えに苦しんでいるにも関わらず、米百俵を学校設立のための資金に充てたという故事です。
『国がおこるのも、まちが栄えるのも、ことごとく人にある。食えないからこそ、学校を建て、人を養成するのだ』と、教育第一主義を唱えた「人づくり」の町であります。
いまだ『米百俵』の精神が息づくこの小さな町に、世界の国から皆さんはやって来ました。文化・科学技術交流の最先端を担う

チャレンジャーとして、日々勉学に励まれて幾年か。
そして、いよいよ新たな門出の日。
ご卒業・修了誠におめでとうございます。益々のご活躍とご多幸をむつみ会一同、心からお祈り申し上げます。
知識・技術の習得もさることながら、皆さんを導き、ご支援くださった方々のご縁や新しい出会いをこれからも大切にされますように。そして将来、皆さんの国際的な知識やご経験が「人づくり」にいかされますことを心から願っております。

退職にあたって

長岡技術科学大学の立上に参加して



機械系 教授
久曾神 煌

AKIRA KYUSOJIN

1977年初夏でしょうか、機械系初代系長の手島立男先生から蔵前工業会館に呼び出され、「君は来年できる長岡技術科学大学の教官になることになっているので仕事を手伝って欲しい」と言われ、ほぼ毎週お会いして設置審用の書類作りに明け暮れ、給与は東工大で仕事は長岡技大でした。その内図書集めは印象に残っています。本学設立に蔵書

12000冊規模の付属図書館が必要で、文部省は300万円助成とのこと。教官予定者に手紙を送り希望図書の購入と共に東大・東工大の退職教授を訪ねて多量の蔵書を寄付して頂き、東アジア財団(アメリカの肝入りで出来た東アジアの低開発諸国に文化資料を与える組織、技大設立直後に廃止)より軽トラック1杯のアメリカ宣伝臭の濃い本(リー

ダースダイジェスト等)を寄付してもらい、数千冊の本を掻き集めました。その他、数千万円の設備購入をし、3社の見積書・選定委員会議事録・指定購入理由書等の書類作りを2週間でしました。
技大では自分の好きなテーマを自由に選んで研究できたこと、スキー・テニス・登山と十分に楽しませてもらい感謝の31年間でした。

理学・工学・技学



電気系 教授
赤羽 正志

TADASHI AKAHANE

昭和55年4月に本学に赴任してから29年、まだまだと思っているうちに定年退職の日を迎えようとしています。私が赴任してきた年には電気棟も既に完成しており、第1次越冬隊(開学当初からの先生方を総称して当時こう呼んでいた)のご努力によって、教育体制も学部課程ではほぼ確立していました。また、高専から編入してきた本学1期生が修士課程に進学した年でもあり、最初から若い人たちと研究をスタートできたという点でも幸運でした。

私は東京工業大学精密工学研究所助手のときに液晶と出会い、それ以来、一貫して

液晶の研究を続けてきました。理学部物理出身の私が研究対象として液晶を選んだのは、液晶が不可思議で興味ある存在だったからで、それが様々な応用の可能性があるという理由ではありませんでした。当時はシャープから世界初の液晶表示の電卓が発売される前で、まだ、液晶という言葉も一般にはあまり知られていなかった頃で、液晶のような有機物質は電子デバイス材料としては下手物だと思われていました。今日の液晶ディスプレイ隆盛は、液晶の研究を始めた当初から考えると感慨深いものがあります。

本学の研究・教育の理念の根幹をなす言葉として「技学＝技術科学」があります。私がこの言葉に相応しい教育・研究をしてきたかという点に関してはいささか忸怩たるものがあります。最近になってようやく、私の場合は理学(科学)の視点から技術を見るということに研究にそして教育に具体化すればよい、と割り切ることができるようになりましたが、いささか遅きに失した感があります。本学がこの理念のもと、小島学長がよくおっしゃる様に「小さくてもきらりと輝く大学」であり続けることを願っています。



同窓会会長
新潟県立塩沢商工高校教諭
磯部 広信

HIRONOBU ISOBE

新しい門出を祝して

卒業・修了される皆さん、おめでとうございます。同窓会を代表して心からお祝いを申し上げます。そして同時に、長岡技術科学大学同窓会の正会員になられたことにも心からお喜び申し上げます。
本学同窓会の会員数は一万人を超え、日本国内にとどまらず、世界の第一線で活躍しています。皆さんも、歴史ある本学の同窓生として各界でご活躍されますよう期待しております。
同窓会では8月4日に「卒業生による卒業生のための新技術！説明会」を開催しました。10名の学内同窓の先生方から、同窓生・在学生に対して最新の研究成果を発表して頂きました。説明会、懇親会ともに盛会で、ぜひ継続したいと考えていますので、皆さんの出席を楽しみにしています。

その懇親会で情報交換をする中で、同窓生の職業・職種の多彩さに改めて驚き、感動しました。企業や教育機関で研究・開発・教育の要となっている方は、勿論、大勢います。選んだ道でも、与えられた仕事でも、非常に忙しく働いています。しかし、その状態を楽しんでいるのが“技大同窓生”です。
仕事以外でも地域の活動で活躍するなど、まさに Vitality 溢れています。学生時代の様々な活動の中で培われたVOSの精神が、知らず知らずのうちに私達の行動を後押ししてくれていることが強く感じられた会でした。
これからの生活の中で、もしも迷うことがあれば、学生時代の自分を思い出し、前向きに進んでください。同窓会でもできることは手助けします。皆さんの将来が幸多いものになることを心より願っています。

退職にあたって

長岡での技術と科学,30年の思い出。



2008年3月,研究室学生,送別会の一コマ

1980年(昭和55年)4月に三重大学から新設直後の長岡技科大に赴任した。第1期生の修士進学と同じ時である。新設の大学は設備未整備でも特有の活気があり、面白さと熱意のある学生が多かった。長岡はもちろん雪国で、当時は学内でも2m以上の積雪で、雪に関する思い出はあまりに多く、とてもすべてを語り尽くすことはできない。初期の学生のなかには「長岡は雪が多いから面白いのですよ。雪がなかったら他の町と同じでしょ。先生、今から一緒にスキーに行きましょう」と言う元気な学生が多かった。おかげでスキーが初めての私もずいぶん楽しむことができた。また雪とセラミックス、ガラスの科学が非常に類似していることを体で感じる事ができた。

私の初めの所属は化学系(現:物質・材料系)で、材料開発工学課程、専攻の担当であった。教授に昇格したとたん化学系の系長に選ばれ、多くの難問を、はるかに年長の教授の人達と調整するのに苦労し、涙の出ることも多かった。その後、環境システム工学新設とともに化学系から環境・建設系(環境システム工学課程、専攻)に移動した。私の研究分野は無機材料特にセラミックス、ガラスであり、さらに環境関連材料科学へと発展した。またこれを通して長岡市、新潟県、新潟市などの地域環境問題に携わることができた。富山高専関係の人達とデンマークの環境事情を見学することができたのは、非常に印象的な思い出である。

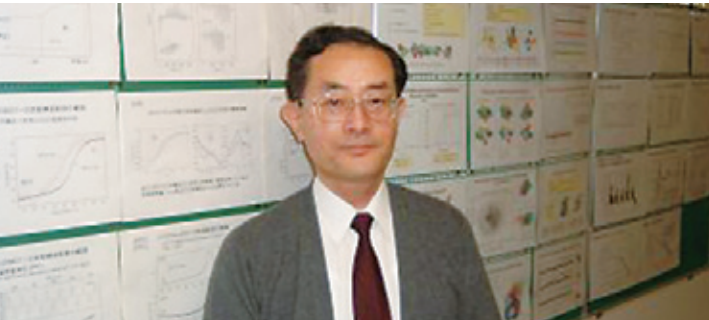
最後の年の長岡花火大会で研究室出身者が集まって私のために花火を打ち上げてくれたのは非常に嬉しく感激した。また赴任直後に、有志学生と一緒に弓道部をつくりその顧問をずっと務め、弓道場をグラウンドの一角に設置することができたのは嬉しかった。さらに日本学生弓道連盟から学生弓道発展功労者として表彰していただいたのも感激である。

多くの教員、学生の人たちの協力と励ましでずっと研究、教育を続けることができ、今は感謝の気持ちでいっぱいです。社会が激動しており、これからはさらに難しい問題が多くなるとは思いますが、本学のますますの発展と、卒業修了生の人たちの活躍を願っています。

環境・建設系 教授
松下 和正

KAZUMASA MATUSITA

定年所感



院生諸君のポスターを背にして、研究室前廊下で

1月20日に前期高齢者(65-74歳)の仲間入りをして、定年を迎えることになった。もう10年すれば「後期高齢者」、20年経てば「末期高齢者」となる。世界保健機構(WHO)による定義の和訳らしいが、言うに事欠いて「後期→末期」では、「もう無用の域に入りましたので、夢も希望も持てません」と言わん許りである。豊かな未来のある博士課程では、前期、後期の後はポストドクであり、末期ではない。高齢者でも、せめて「初級

→中級→上級高齢者」位のユーモアが欲しいものだ。大多数の当事者は、物理的には「前期→後期→末期」となる必然を十分承知している筈だ。それを敢えて掻き立てるような訳語に何の不審も感じない厚労省の役人は、上級とは言わずも、中級の「言語・EQ不全者」ではないかと思えてくる。言語は頭脳労働に不可欠のツールであり、貧弱な言語能力では、優れた思考・判断は期待できない。その意味で「中級程度の言語能力不

自由者」を一国のリーダーにするのは「如何なものであろうか?」。翻って見るに、大学も全入時代が近づいて、本学も初級～中級の学力不自由者が増えつつあるようだ。更に進行して、中級の不自由者が多数を占めるようになれば、教員の仕事は、頭脳労働から肉体労働へと質的变化?を遂げるだろう。我が愛する技大が、この苦難の時代を勇氣と知恵で乗り切って呉れることを、切に願っている。

生物系 教授
曾田 邦嗣

KUNITSUGU SODA

18年間お世話になりました



40年前と現在

バブル崩壊直後の平成3年4月に新規採用で長岡に来て以来、丸18年お世話になりました。赴任した当時の4月、寒さに震えながら、窓越しに市街地、東山連峰やその奥の残雪が残る守門岳の景色に見とれていたことや、「京阪神に24年、東京で23年過ごして、人生の残り1/3を長岡で過ごします」と新任教員紹介文に書かせて頂いたことなどが懐かしく思い出されます。本学や新設の生物系の内容をほとんど何も知らずに赴任して、特に感じたことは、①想像していた以上に研究が出来そ

うだ、②他の地方大学と比べ文科省から厚遇されている、③講義というのは実に重要だ、などでした。

退職にあたって、企業での研究開発と本学での教育研究に41年間携わったものとしては、①「小さくてもきらりと光る、特色ある大学」として本学を発展させる意義は大きい、②「技術科学」という言葉・内容を大事にして、それを特色の中に活かしていく、③優秀な学生に一生懸命になるのも必要だが、出来の良くない(教育次第で能力が開花する)学生を、研究を通じて育

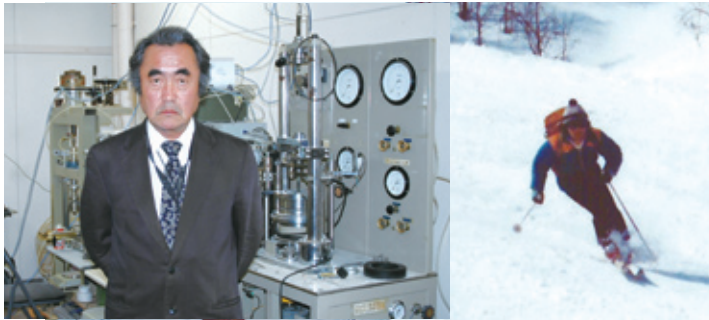
てること(研究教育)が大事で、研究センターの本学にとって非常に重要、などを強く感じています。

最後に、18年間好き勝手なことをさせて頂き、多くの教職員の皆さまにお世話になったことを感謝するとともに、本学のますますの発展を祈念しております。

生物系 教授
附属図書館長
森川 康

YASUSHI MORIKAWA

地盤と39年間



学務課 技術専門職員
和田 正

TADASHI WADA

昭和44年4月に新潟大学に採用され土木工学科に9年、昭和54年から長岡技大建設系の技官として30年間お世話になり定年を迎えることとなりました。昭和39年に発生した「新潟地震」では地盤の流動化(液状化)による被害が著しく報道され、「新潟地震」のあと昭和46年に新潟市の「万代島の砂」を使用し、全国の研究機関が持つ種類の異なる試験装置を使用し、一斉に飽和砂の液状化強度試験が行われました。新潟大学では、振動三軸試験機を用いた飽和砂の液状化強度試

験と合わせ、一軸振動台を用いて飽和砂の液状化現象の再現試験などの実験を行ってきました。東京近郊の液状化強度試験を数多く依頼されましたが、純粋な砂は非常に少なく、細粒の砂質ロームが多かったと記憶しています。また、地滑りは以前から理学部の地質部門(科)が行っていましたが、昭和46年イギリスのBISHOPらの発表論文を引用、昭和47年に特殊載荷装置外として日本ではいち早くリングせん断試験機を製作、地滑りの研究に取り組み始めました。昭和50年頃から、遠くは

北海道の地滑り地の残留強度測定等の依頼実験を多く受けるようになってきています。平成元年頃、建設省土木研究所によって「リングせん断試験機を用いた残留強度測定方法について」という大まかな指針が作られてから、より多くの民間企業に設備されるようになってきています。

最後に、故小川正二先生並びに内外の多くの皆様方に支えられ勤めることが出来たことを感謝し、本学のますますの発展を切望しております。長い間大変お世話になりました。

退職にあたって



技大を去るにあたって

財務課 専門員
山田 信夫

NOBUO YAMADA

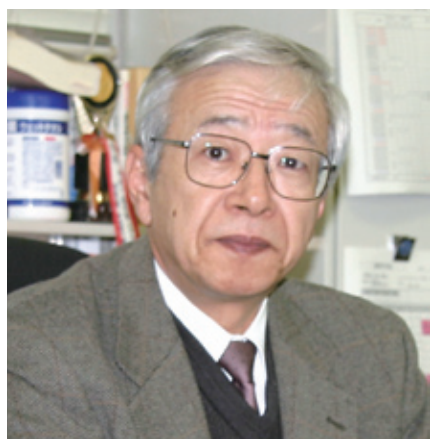
「光陰矢の如し」と言いますが、3月に還暦、遂に定年退職を迎えることとなりました。この間、旧文部省と再編統合となった旧科学技術庁(現:防災科学技術研究所)に12年間、長岡工業高等専門学校に2年間、本学に26年間の永きに亘り、何とか曲り形にもやってくることができたのは、良き上司、先輩、同僚、後輩に恵まれたお陰と心から感謝する次第であります。

本学では、主に会計畑一筋に勤務させていただき、色々な経験をさせていただきました。昭和57年5月に本学会計課(現:財務課)に採用となり、当時は、創設期の途上であり、

毎年新営建物が建築され、それに付帯する建物新営設備の調達、事務局に壁面収納棚の設置、生物機能工学課程の設置要求、また、国立大学法人化に向けての財務会計システムの導入、運営費交付金等資金管理業務、平成16年10月に発生した未曾有の中越地震の被害による極限エネルギー密度工学センターの心臓部である静電加速器、大強度パルス軽イオンビーム発生装置、衝撃電圧発生装置及びイオン照射装置の修繕、学内電子計算機システムの共有化による教育研究統合計算機システム、学生関係各種情報の一元化による大学基幹業務シス

テム及び教員情報の一元化による教員情報総合データベースシステムの調達等・・・今となりましては、契約・調達業務等を担当させていただいたことが、一つ一つ懐かし思い出されます。本当に長い間、皆様方には大変お世話になり有難うございました。

現下の世界的な経済不況、金融危機の中での国立大学法人の抱える諸課題、次期中期目標・計画を横目で見ながら卒業となりますが、本学が新しい時代の要請に応える開かれた大学として益々の発展と皆様方のご健康とご活躍を心から祈念し、退職の挨拶とさせていただきます。



感謝!感謝!感謝!

産学・地域連携課長
中原 誠

MAKOTO NAKAHARA

この度、公務員生活42年、定年を迎えることになりました。公務員歴は、東京教育大学(昭和53年閉学)に6年6月、筑波大学に6年6月、長岡工業高等専門学校に3年、そして長岡技術科学大学に26年となります。この間大過なく勤めることができましたことは、それぞれの大学・高専で良き上司、先輩、同僚、後輩に恵まれ、そして家族の支えがあったものと感謝しております。

長岡技術科学大学には、昭和55年4月

からお世話になることになりました。その年の冬は、55-56豪雪と言われる大雪を体験。構内の低層建物、自転車置場の雪下ろしを職員総出で行ったことが懐かし思い出されます。仕事においては、着任当時は開学後間もないこともあり、規則の未整備のものが多く、規則づくりに追われたものです。長岡技術科学大学においては、これまで8課にわたり仕事をさせていただきました。この間、役員の方々、教員、事務職員、技術職員の皆様には、

何かとご指導・ご協力を賜り、何とか定年を迎えることができました。この紙面をお借りいたしまして感謝申し上げます。

最後になりますが、大学は法人化され益々大変な時代になるものと思いますが、長岡技術科学大学の益々のご発展と皆様方のご健康とご活躍を祈念いたしまして退職の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



2年間大変お世話になりました

学務課長
佐藤 誠

MAKOTO SATO

私は昭和42年6月に新潟大学に採用され、新潟大学で定年を迎えるかなと思っていましたが、平成11年から沼津工業高等専門学校、福井大学、高岡短期大学及び富山大学と勤務し、平成19年4月にこの長岡技術科学大学に採用され定年を迎えることになりました。

着任して早々“はしか”による休校が関東の大学から始まり、とうとう本学の学生も1名罹患し、その学生が多数の授業を受けていた

ことが判明したので、執行部と相談し1週間の休校措置を採ることになりました。今度は“はしか”の振替授業日に出勤していたら中越地震が発生し、学生の避難や、安否確認の対応などに追われました。中越地震後だったので地震はこないと思っていましたので大変驚きましたが、大学の被害がほとんど無く本当に良かったです。

思い返せば、新潟大学では病院での検査オーダーの導入、沼津高専では技科大の教

員にも協力をお願いしての教育教員研究集会の創設、福井大学では工学部の県外での試験実施に向けての準備やとんでもない入試ミスの対応などが思い出されます。

高校まで過ごした長岡で定年を迎えるのも何かの縁を感じています。

長岡技術科学大学がますます発展し、キラリと光る大学になっていきますよう心から祈っています。本当にお世話になりました。



退職にあたって

国際課 課長補佐
齋藤 寛章

HIROAKI SAITO

昭和56年4月から長岡技術科学大学に長い年月お世話になり、この3月に定年退職を迎えることとなりました。

本学に最初に勤務した頃は、まだ、現在のキャンパス景観とは全く異なっており、建物も事務局棟、講義棟や幾つかの研究棟等は完成していましたが、まだまだ、建設中の施設が点々としていたのを最近のように思い出されます。また、道路脇の桜並木や中庭の樺等の樹木は10センチ程の幹だったのが、現

在では見違えるように大きく成長し自分のお世話になった過ぎ去った年月を痛感する次第です。

採用時は、右も左も分からない職場において、日々、諸先輩、同僚の方々にご指導・ご支援をいただき毎日楽しく過ごす事ができたこと感謝しております。

また、特に近年は大学も改革・法人化等で当時とは、大きく変化しましたが、今、自分の歩んだ足跡を振り返ると少しでもお役に

立てたかどうか疑問ではありますが、周囲の教職員の温かいご支援のお陰で、楽しく勤務させていただいたことに感謝しております。

最後になりましたが、今後、長岡技術科学大学が益々、充実・発展していかれることをお祈り申し上げるとともに、お世話になりました皆様方のご健勝とご活躍を心から祈って退職にあたってのお礼と挨拶にさせていただきます。